

大震災を乗り越えて

復興に突き進む「あいくー」

大熊のグループ「會空」が作る



あいくーを手作りする (左から) 庄子ヤウ子さん、三瓶美和さん、阿部智英子さん、松本敬子さん

会津若松市大町にある「日本大震災で大熊町から避難して来た庄子ヤウ子さん、部智英子さん、松本敬子さん」を代表に三瓶美和さん、阿

ら10人で平成24年3月12日に設立された。主にあいくー、しまくまなど大熊町ゆかりの熊のぬいぐるみを作っている。

あいくーという名前は、会津の「會」と、帰れない故郷大熊町の空はつながっているという意味を込めてつけたそうだ。材料の木綿は市内の山田木綿のものを使っている。体長22センチの中くらいのあいくーは、作るのに約3時間かかる。特注サイズもできるが、わたを詰めるときは、わたがしまりなど、結構難しい。特に曲線を縫うときは大変。完成するとやはりうれしい。

最初は見よう見真似でや

藩主・加藤嘉明が伝習

寛永4(1627)年に会津藩主・加藤嘉明が会津に入城した際、前領地の伊予松山から織師を招いて会津に伝習したのが会津木綿の起りといわれている。

同20(1643)年に会津藩主になった保科正之が綿花の栽培を奨励した。藩士の妻が機織り(はたおり)し、農商工業者が藍木綿花の栽培を奨励し、製品を販売した。その後、明治時代後半に綿花の輸入量が増え、紡糸紡績業が発達すると、会津木綿の生産の場は

ついていたが、だんだん上達した。あいくーは「自立する」という意味から立つようになった。昨年の9月から今年の4月までで、2300から25000個ぐらい作ったという。

あいくーの種類はたくさんあり、春や冬のパージョン、新島八重パージョンなどがある。お客さんの要望に応じて、カッパやカエルなども作っている。

庄子さんたちが作ったあいくーは、フランスのバリでも展示されたほか、化粧品とのコラボもしている。庄子さんたちは、「大熊町を忘れないで」「大熊町はがんばっているよ」という気持ちを含めて、世界に発信している。

庄子さんたちは、大熊町へもどっても、作り続けたいとちがっている。復興に向けて一生懸命作業にとりくんでいる。(稲村聖矢、角田希空、加藤伶)



「あいくー」の原型(右)と、完成した「あいくー」のストラップ(左)

檜葉町民を勇気づける新聞 サポートみさとが毎月発行

安達忍さんに聞く

「サポートみさと」の「これまでうれしかったこと」は、安達忍さんに「おたがいさま新聞」の発行の苦労などを聞いた。一つも心がけていることは何ですか。読みやすさと問い合わせを記載すること、祭りなどのイベントではバスの時刻表を必ずのせることです。



キャラクターの「あいづじげん」を手にする安達忍さん

に避難してきて、仮設住宅や借り上げ住宅に住む人たちのための情報紙で、毎月1回発行している。7月末には40号を発行する。仮設住宅内のイベントや会津美里町内の見どころなどを紹介している。A3判サイズで1ページ。最も楽しいのは、夏祭りと、盆踊りのときだ。注意しているのは、日付や料金などを間違えないようにすることで、何度も見直し



お祭りなどの行事が書いてある「おたがいさま新聞」



私たちが編集しました！
末西太郎 (城北小)
岡本啓太 (城北小)
加藤太 (城北小)
藤田希空 (須賀小)
角田大 (一箕小)
大向勝 (郡山)
村田聖矢 (ザベリオ学園中)
稲村 (会津若松一中)